

リノベーションまちづくりとは？

まちのことをよく知り、まちの方とのつながりや、自分のやりたいことを活かす。地域経営課題の解決を目指し、今ある地域資源を活用し、志ある市民がまちの新たな魅力となるコンテンツの創出を通して「ほしい暮らしは自分でつくる」を実践する。市民自らの活動による新たなコミュニティ、そして、まちへの愛着と共感の輪の広がりからさまざまな取り組みが絡み合い、まち全体の魅力が高まっていく。

リノベーションスクール

リノベーションスクールとは、市内外から集まった受講生が「ユニット」と呼ばれるチームを組み、さまざまな地域資源を活用しながら地域経営課題を解決する事業計画を作成するワークショップです。地域に必要なサービス、まちで暮らす人々が豊かになるビジネス、まちに面白い人が集まる仕組みなどを検討し、最終日には、対象案件のオーナーや地域住民へ事業化を前提とした公開プレゼンテーションを行う「短期集中実践型スクール」で、修了後、受講生自らが事業計画の実現を目指します。令和3年度にはこれまで開催していた草加駅東口周辺エリアから舞台を移し、初めて「谷塚駅周辺エリア」で開催しました。



■ユニットでまち歩き

コロナ禍での開催。これまでのリノベーションスクールとは違い、オンラインでのコミュニケーションも取り入れながら形を変え計5日間での開催となったスクールには「ほしい暮らしを自分でつくりたい」と熱い思いを抱いた方々が参加されました。3つのユニットに分かれ、まちのことを深くリサーチしながら、さまざまな地域資源を活かして、どのような提案ができるかを真剣に考え抜いた5日間。



■3日間に及ぶユニットワーク

何もないまち—その思い込み、ぶっ壊せ。

「第1回リノベーションスクール@やつか」のキャッチコピー。「『やつか』ってどんなまち？」という問いに、「何もないまち」と答える方が少なからずいらっしゃいます。

でも、本当にそうなのでしょうか？

令和2年度から開催した、『やつか』の未来の方向性を検討するワークショップ「谷塚家守塾」で、改めて『やつか』を見つめ直してみると、「やつからしさ」を形づくるまちの要素がたくさんありました。何もないと思っていた『やつか』。でも見つめ直してみるとたくさんの魅力で溢れていた『やつか』。まちの魅力を紡いで新たなまちの魅力に進化させ、自分のほしい暮らしをつくっていく。

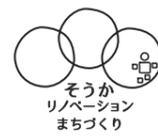
リノベーションスクールの修了生の皆さんは今、谷塚駅周辺エリアでほしい暮らしを自分たちでつくろうと動き出しています。そうした動きが周りの人たちの共感呼び、波紋のように共感の輪となって広がっていき、さらにそこからまちの新たな魅力が生まれていくはず。



■最終プレゼンテーション後の集合写真

皆さんも一緒に、そうかりノベーションまちづくりでほしい暮らしをつくってみませんか。

第1回リノベーションスクール@やつかの概要・各ユニットのプレゼン内容は
こちらから。



このまちの人が、好き。

vol.06

そりまレ

そうか リノベーション まちづくり レポート

リノベーションスクール、そして。



スペシャルティコーヒーの美味しさを日々豊かに

旧日光街道の草加宿エリアに自家焙煎のロースタリー兼カフェ、ecoma coffeeがオープンして4年目を迎える。店前を通ると焙煎されたコーヒーの芳しい香りと、スタッフが笑顔で迎え入れてくれる。地域の人々から愛されていることがよくわかる人の笑顔が絶えないお店だ。2021年5月に株式会社カフェイネイチャー(Caffeinate you Inc.)として法人化。コーヒーであなたの人生をカフェイン入り(Caffeinate)にする、ecoma coffeeにはスペシャルティコーヒーの素晴らしい味わいで人々に感動をもたらす、日々を豊かにしていきたいという想いが込められている。



このまちでできることが、まだまだある。
ローカルで広げていきたい。

出会いからつながりが生まれる

第2回リノベーションスクール@そうか(以下、リノスク)に参加した、その年の4月に開業した時は実店舗はなく、イベント出店などで活動していた安部さん。市外で開催されたイベントに出店した際に、cafe gallery CONVERSIONの店主である今井慶子さんに会い、お店に遊びに行ってみようとして草加に降り立ったことがターニングポイントとなった。東京都足立区生まれの安部さんは足立区を拠点とし、草加にはほとんど訪れたことがなかったと言う。

草加を訪れた際に、出会った草加市産業振興課の職員から市主催のまちの学校やリノスクを薦められ、開業につながる何かを得られないかと参加した。まちの学校がとても面白かった事から、もっと知りたいという気持ちになっていった。店舗を持つ上で場所へのこだわりは強くなかったが、リノスクに参加し

たことで喫茶店の居抜き物件で偶然やれることになり、そこからスピーディに物事が動き出した。「場所が決まったことで、色々な事を現実的に考えないといけなくなってきた。一人だったらもともと長い期間がかかっていたと思うが、参加した皆さんのつながりができ、相談できる相手が見つかった。」と安部さんは話す。特に役に立ったつながりは役所とのつながり。面倒見の良い担当者が親身になってくれた。内装工事で床剥がしも一緒にやった。また、ユニットメンバーがオープンに至るまで応援してくれたことが心の支えになった。「商店会や地域とのつながりはひとりでは難しかった部分がある。ご挨拶できて顔を知ってもらえたことが大きい。そのおかげで多くの方が毎日のようにコーヒーを飲みに来てくれるようになった。」

よりローカルに視点を向けるようになった

これらの経験から、地域の人との関係性の作り方を学んだ。それを実践してきたからこそ、今はまちの中に溶け込んでいる。オープンした当初から、お店の前を通る人に向かって挨拶する事はしっかりと続けている。また、お客様同士をつなげることも意識しているため、お客様と一体となったコミュニティが生まれ、コーヒーを飲むだけでなく、顔馴染みに会いにくる場所となっている。そんな良いコミュニティは人にもまちにとっても良い影響をもたらす。

コロナ禍となり、ベッドタウンという土地柄、在宅ワークに切り替え、まちで自分の暮らしを良くしていくという人が増えた。センシティブになる部分はあるが営業時間等を工夫しながらコロナと上手く付き合っていく。まちの変化に合わせて、こちらも変化が必要だ。地域の中でお金の循環をつくることや、小さくても強いお店を作るという想い、強くなつた。

スペシャルティコーヒーの専門店。
産地にもこだわり選び抜いた豆を丁寧に自家焙煎している。

リノベーションスクールについて一言

チャンスはみんなに平等ではない。ただ巡ってくるもので、それがチャンスだと思える心の準備ができていくかどうか。そのきっかけになるのがリノベーションスクール。きっかけを求めている人には良いワークショップだ。

エコマコーヒー
ecoma coffee

アベ ジュンペイ

安部 順平

1988年生まれ
足立区出身

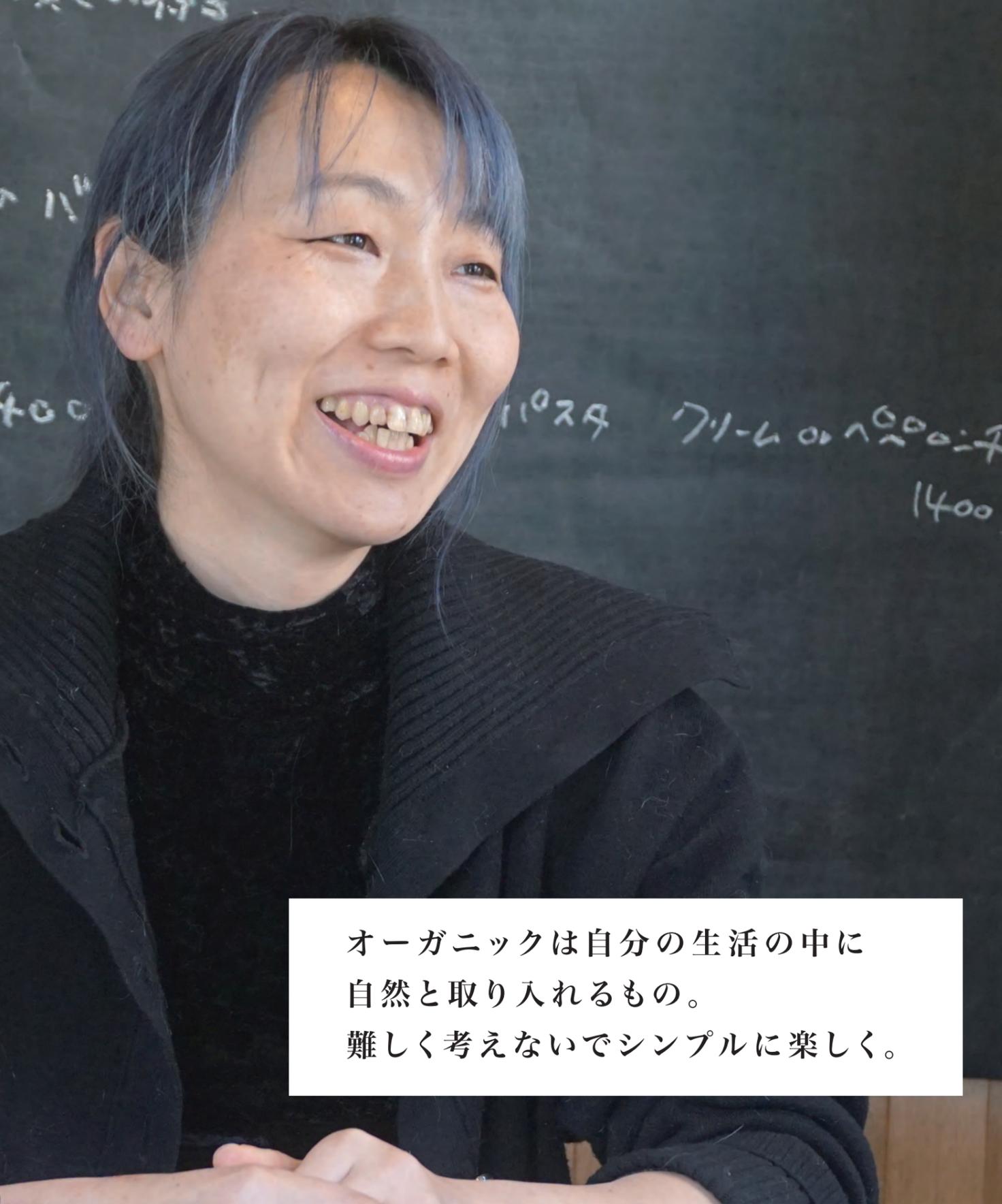
草加市住吉 1-13-2

火～金 7:00～17:00
土日祝 9:00～17:00

月曜

ecoma





オーガニックは自分の生活の中に
自然と取り入れるもの。
難しく考えないでシンプルに楽しく。

野菜とお酒のバル スバル

タナカ スバル
田中 昂

1981年生まれ
草加市出身

草加市住吉 1-3-26
17:00 ~ 23:00
日・祝 (臨時休業有り)

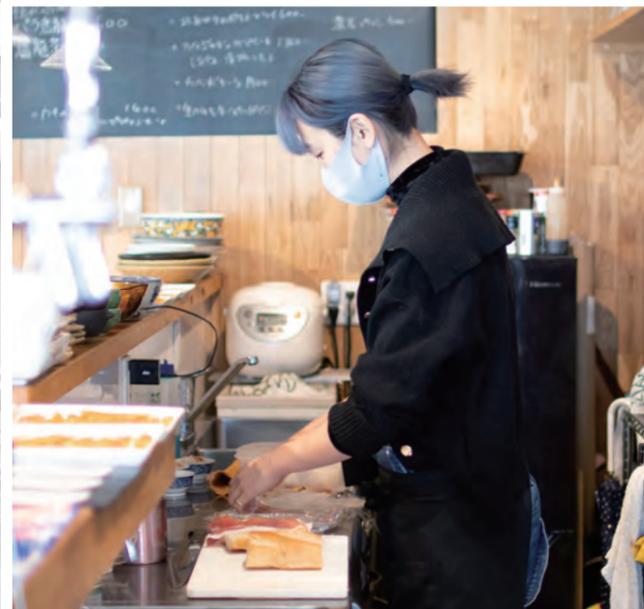
スバル

オーガニックレストラン認証の野菜料理を楽しめるバル。
草加産野菜を中心に地場のおいしい野菜料理を提供。

＼リノベーションスクールについて一言／
事業はやり始めてからが大変だ。リノベーションスクールに参加したからといって必ずしも成功するわけではない。開業する過程でひとつの通過点に過ぎないので早いうちに経験した方がいい。いろいろ考えすぎず、悩んでいたらとらずにやってみよう。

野菜が元気を補充してくれる

2017年3月に野菜とお酒のバル「スバル」を開店し、早5年が経とうとしている。最近はお麦粉や油、砂糖を取らず野菜だけ食べたいというお客様が増えた。野菜を食べることで無意識に元気を補充しに来ていると田中さんは気づいたのだ。そして野菜にはその力があるとすごく感じた。「今、必要なのはこれかもしれない。」お店のコンセプトがあやふやで固めたいと思っていた時期、草加市氷川町でオーガニック野菜を栽培するchavipelto-チャヴィペルト-中山さんの想いに共感をしたことがきっかけで昨年、オーガニックレストランの認証を取得し、今も尚、進化を続けている。



自然な流れで育まれた地域との関わり

そうかりノベーションまちづくりに関わる前、田中さんは料理の引き出しを増やすため何軒か飲食店を渡り歩き、修行していた。35歳を目安に開業を考えていたため、いよいよ開業準備のために長年勤めていた飲食店を辞め、地元である草加で物件探しを始めていた。そんな時、たまたま草加市職員である同級生に紹介され「そうかりノベーションまちづくり構想検討委員会」に参加した。当時、勉強のために色々な開業セミナーで情報を集めていた中のひとつだという。「料理を作るのとお店を作るのは全然違う。勉強していく中で、社会貢献や地域との関わりが課題ではあるとは感じていたが最初からそれがあったわけではない。今まで色々な人に助けってもらったが、助けてもらえばかりではバランスが悪い。それを返すことが自分には自然な事で特に意識はしていなかった。

今になってそう感じる。」と振り返る田中さん。2016年に開催された第1回リノベーションスクール@そうか(以下、リノスク)に参加したことで、大勢の方にスバルを知ってもらえた。本来、開業は孤独な道になるはず。関わってくれる人達が皆、自分ごととして自然と捉えてくれた事がありがたいと感じた。開業したいとずっと焦っていたので、良いタイミングでリノスクがあった。この時、地の食材を探す一環で気になっていた農家、チャヴィペルトの中山夫妻と出会った。当時はお店のコンセプトに強いこだわりはなかったため、土地に合わせて柔軟に合わせていきたいと考えていたことから野菜料理のお店をやることになった。野菜は季節によって味が変わり、出始めと終わりでも変わるので、どうやって美味しく調理するかを考えるのが楽しいという。

逆境から見えてくることもある

コロナ禍で何かと制限のある中の営業ではあったが色々なことが試せる良い機会だった。外食離れやお酒離れが進む時世、テイクアウト商品やランチ提供はコロナ禍とは関係なく、数年後には考えないといけない課題だった。お酒が提供できない状況の中でも、普段お酒しか飲まない常連の方も変わらず足を運んでくれて、そうした暖かさがとても嬉しかった。暇な時はお客さんとじっくりお話もでき、以前のようにバタバタと忙しく営業していたら気づけなかったことに気づけたと逆境をポジティブに捉えていた。

「地域とのつながりはお客様に作ってもらっている。自分は料理をツールとして、ここに集う人が楽しむ土台を用意しているだけ。そして、その人たちがつながる様子を見ているのが楽しい。楽しい仕掛けを作りたい。」と明るく田中さんは話す。

いつもの日常が、実はとても特別なこと。
面白さはすぐに近くにあることを知ってもらいたい。



シェアアトリエ つなぐば

コジマ ナオ
小嶋直
1980年生まれ 練馬区出身
マツムラ ミノリ
松村美乃里
1979年生まれ 静岡市出身

🏠 草加市八幡町 935-4
🕒 月～金 11:30～15:30
土 11:30～17:00
🗓 木・日曜
🌿 つなぐば
家守舎



困った時にそっと背中を押してくれる、
そんな面倒見の良い人が多く集まる場所。

／ リノベーションスクールについて一言 ／

誰かがやるから、やるのではなく、やりたいことを、今自分の手元に手繰り寄せることができるのがリノベーションスクール。できない言い訳を考えているなら、まずは参加してみると良いかもしれない。これまでの自分の常識を覆してくれるきっかけとなると思う。

他にはない、ここにしかない日常づくり

新田駅東口から徒歩15分ほどの住宅街にあるシェアアトリエつなぐばも今年の6月で4周年を迎える。シェアアトリエではカフェやワークショップ、コワーキング、また、テナントである親子の遊びの場、美容室など日々多くのお客様が来る人気の場所となり、地域の方に愛される場所となった。それも、つなぐば家守舎が掲げる「DIO=ほしい暮らしは私たちでつくる」という言葉のとおり、多くの方が自分ごととして関わられる場として認識されたからに他ならない。そういったことが認められ、昨年グッドデザイン賞を受賞した。今年はテイクアウト専用キッチンや草加市初の民設図書館と次なる案件も続々とオープンを予定しており、ますますつなぐば家守舎の活躍に目が離せない。



多くの思いをつないでいく場づくり

つなぐば家守舎は第1回リノベーションスクール@そうか(以下、リノスク)で誕生した家守会社である。代表取締役の小嶋さんは、当時はローカルユニットマスターとしてリノスクに参加し、同ユニットで一緒だった松村さんと会社を立ち上げた。小嶋さんは元々、川口市でカフェやギャラリーなどリノベーションされた建物が集まる場所で設計事務所を主宰していた。そこでは、同年代の事業主が集まっていたため仕事以外にもお互いの子供の面倒を見合うなど、日常の暮らしの環境としても最適と感じていた。そんな折、草加市職員からリノスクに誘いを受けた。一方、松村さんはリノスクを受講前に草加市が主催する「私たちの月3万円ビジネス」(以下、3Biz)を受講。そこで、多くの地域で活動したい女性と知り合うきっかけとなった。しかし、そこで感

どんな状況にも揺るがない日常をつくる

じたのは子連れで安心して働ける環境が少ないことだったという。そして、リノスクでは子連れで働けるシェアアトリエを事業として提案した。提案には多くの3Biz生も手をあげてくれて、一気に現実味を帯びるものとなった。小嶋さんも提案の将来性を感じ、共に作ることを決意したという。その後、紆余曲折がありながら、今の場所に辿り着いた。そこで、物件オーナーとの想いが実り、2018年6月にシェアアトリエつなぐばはオープンした。「工事の最中から多くの方にお手伝いに来ていただき、オープン後も様々な困難に遭っても集まってくれる仲間がいつも支えてくれています。それも、つなぐばが自分ごととしてほしい暮らしを作れる場ということを感じてくれているからだと思います。」

2020年3月、新型コロナの発生により一度はお店を休むことになってしまった。いつも集まってきてくれる仲間でも来ることができず寂しかった。人が集まる場が否定されてしまった気がしたが、それでも多くの人がつなぐばを望んでいたことがわかった。それからどんな状況にも揺るがない日常を作ろうと、日々考えて行動をするようになった。は毎月決まった日にマーケットを行うなど、地域の方にもっと足を運んでもらえるように、イベントから日常へとシフトしていった。そのおかげもあってこれまで以上に地域の人へ知ってもらえることができ、最近では徐々に多世代の方が来てくれるようになった。さらには物件オーナーと共に第2,3案件に取り組みきっかけもできた。「つなぐばはこの地域のリビング、ダイニングのような気軽に立ち寄れる場所になってほしい。」と話す小嶋さんの笑顔が輝いた。